

米國の絹並に人絹布産業の現況について

小 泉 所

Tokoro KOIZUMI:—On the present situation of American silk and rayon broad goods

緒 言

社會經濟の進展は分化と其の綜合の歴史である。綜合は分化し、分化したものは總て綜合への道を通る。而して分化は一般に社會經濟の生成發展の過程に於て行はれ、綜合は分化したものが、最早その社會的機能を効果的に果し得ず、却つて社會經濟の進展を阻害する如き段階に達した時に行はれる。

私は茲に、コペランド並にタアルナー共著にかゝるアメリカの『絹並に人絹織物の生産と分配』⁽¹⁾なる勞作をば、上述の線に沿ふて紹介しやうと思ふ。

1. 斯 業 の 文 化

米國絹布産業の原本形態は前原料所有工場 (former stock-carrying mill) である。茲に於ては、全機械工程が同一經營部内に於て行はれ、現今斯界に見らるゝ如き未完成品取引は殆んど行はれなかつたのである。

然るに凡そ1920年以來、斯界に於ても、製造販賣方法に重大な變化が生じ、仕上販賣工程の原本形態よりの分離が、著しい現象として前面に推し出された。然らば1920年を境にして、斯る分化は何故に發生し、當該分化機能を擔當すべき仕上業者 (converter) の誕生を見たのか。タアルナーは之を次の如く説明して居る。『1920年の機械産業の金融困難以來、當該産業の根本的投資機構に變化が生じた。競争は増加し、業者は製品を迅速に賣却する必要に迫られた。茲に仕上販賣機能を營む仕上業者に、未完成品状態で製品を販賣する行爲が急速に發展したのである。業者は未完成品状態で製品を處分することに依て、資本の製品に固定する時間を短縮することが出来、且つスタイル變遷に基く危険を避くる事が出来た。他方に於て仕上業者は——原料所有工場の前販賣係、又は代理商なる場合多し——1920直前年に於て、製造業者に依て獲得されたと想像さるゝ財仕上に基く利潤の故に、仕上業務に留らんとした。』斯くて原料所有工場は、製品仕上過程に於て生ずる危険可能を可及的に免れんとして、茲に仕上業者の發生を許したのである。

次に口錢織布業者 (commission weaver) が前原料所有工場より分化した。謂ふ迄もなく口錢織布業者は自己の設備並に勞働を提供し、代償として口錢を受ける賃勞働者の生産業者であるが、この段階には『利潤を得て財を生産することに失敗し、今や織布勤勞を提供することに依てのみ衣食の資を得てゐる前原料所有工場が多い』⁽²⁾事情よりして、この分化には能動性なく、止むを得ざる脱落と稱するが適當な分化表現であらう。それが現今斯界に於ける有力な生産部門として、被派生者たる原料所有工場に對し、對立的地位にまで止揚さるゝに至つたのは

(1) M. T. Copeland, W. H. Turner;—Production and distribution of silk and rayon broad goods. 1935

(2) op. cit., P. 49. (3) op. cit., P. 50.

斯界に於ける流行の變遷並に仕上業者との結合關係に基くものである。

更に茲に注目すべき現象は、既製品製造業者 (cutters-up) の躍進である。業者は以上の諸要素とは大部分獨立して、大戰後の服裝の規格化運動の波に乗り機織業界に重要な地歩を占むに至つた。業者は大量生産を行ふことに依り完成織布の一大消費者となつたのである。

上述の分化過程をとり、1920年以後のアメリカ機織産業は、根本的には、四部門より構成されてゐるのである。原料所有工場、口錢織布業者、仕上業者、既製品製造業者即ち之である。原料所有工場は、自己の負擔に於て原料纖維を購入し、仕上業者に分配する爲には半製品狀態にまで、既製品業者又は小賣業者に分配する爲には完成品狀態にまで織布生産をする。口錢織布業者は上述の如く、織布形態に於ける勤務を提供し、代償として口錢をうける賃労働者の生産業者であり、一般に仕上業者より原料纖維の供給を受け、製品は再び仕上業者に引渡すを常態とする。次に仕上業者は原料所有工場又は口錢織布業者より、半製品狀態に於て織布を購求し、それをば完成品にまで仕上げ既製品業者その他の小賣業者に分配する機能を持って居る。既製品製造業者は、完成織布を仕上業者又は原料所有工場より購入し、それをば衣裳形態にまで成熟せしめるものである。

斯くの如き相互關係と機能とをもつ米國機織業界の四部門は、その後生ぜる重大な社會經濟上の變遷の故に、その間に大きな磨擦と支配被支配の上下關係を惹起した。

周知の如く、世界大戰は社會經濟の凡ゆる部面に甚大な影響を與へたが、婦人の戶外職業戰線への進出も其の現れの一である。この婦人の職業戰線への躍進は、婦人をして社會經濟的に獨立せしめ、従つて生ぜる購買力増加は婦人を駒つて奢侈的報物へと走らしめた。この事は、スポーツの流行、生活の新様式と相俟つて、輕快な報物 (lightweight clothing) 個性ある報物 (individuality in clothing) の需要を増加せしめた。

斯の如き社會生活上の變化とスタイル循環速度の増加とは、自ら、固定投資並に製織問題よりの制約を免れ、且つ市場變動に迅速な適應能力をもつ仕上業者に幸したのである。加之、口錢織布業者が原料所有工場より脱落し、仕上業者に隸屬するに至つて以來、彼は分配統制上の支配權を確保するに至つたのである。蓋し彼は之に依て、自らは設備投資並に製造上の負擔をとる事なしに供給源泉を確保し得るのみならず、一般に大資本投資下で活動してゐる原料所有工場を牽制し、この源泉よりの供給をも自己に有利に展開し得るに至つたからである。

次に口錢織布業者は仕上業者との結合關係に於て、その存在を維持して居るのであるが、婦人の肌着並に便服 (under weaver and negligé) に對する嗜好の變遷は、當該業者に相當大なる活動の舞臺を與へた。從來婦人の肌着は綿布を以て製作されるのを普通としたが、絹及び人絹價格の下落、製造工賃の低下、絹織物の重量、婦人の外出着形態の變化、しなやかにして密着する肌着需要の創造等の諸事情が無地の半製品——口錢織布業者は主として斯るものを製造してゐる——に對する需要増加を將來せしめたからである。⁽⁴⁾ 現在口錢織布業者により製造される報物總額は、斯界の製造總額の 40% に達し、それは専ら下着製造業者に依り消費されて居る有様である。⁽⁵⁾

更に既製品製造業者は完成織布を購求し、それを衣裳に仕立てるを業とするものであるから業者も亦二の供給源泉——原料所有工場と仕上業者——を持ち得るわけであり、従つてこの點に於ては、仕上業者も當該業者からの制約は免れ得ない。それかあらぬか、タフルナーは「仕上業者の機能の既製品業者による代行は、近年に於ける一傾向である。」⁽⁶⁾ と述べて居る。

今上述せる四部門の製品需給の相互關係を見るに、口錢織布業者に於ては、製品の全部は未成品であり、原料所有工場にありては、總生産額の 59.1% が未成品 40.9% が完成品である

(4) op. cit., p. 53.

(5) op. cit., p. 50.

(6) op. cit., p. 51.

従つて原料所有工場に於ても、生産の重點は未完成品製造であるが、その内未完成品總額の81.1%、全製造額の50.8%が仕上

I 生産者形態別織布分配表⁽⁷⁾

ム ケ	原料所有工場			口錢織布業者
	半製品	完成品	計	半製品
仕上、卸賣、仲買	81.1	7.0	50.8	58.7
其 他 の 工 場	1.8	—	1.1	37.6
既 製 品 業 者	15.9	69.8	38.0	3.7
小 賣 業 者	—	14.8	6.1	—
其 他	1.2	8.4	4.0	—
計	100.0	100.0	100.0	100.0
總 計	59.1	40.9	100.0	100.0

額の半額以上を購入する。斯くて生産仕上販賣機能の分化の故に、仕上業者は原料所有工場に對しては無上の顧客であり、且つ最強の競争者である。而して口錢織布業者に對しては其の支配者である。然し仕上業者は製品の大半を既製品業者に供給する事よりして、逆に後者よりの制約をうける。

斯くの如く、米國機織産業に於ては、四部門夫々分立抗争の姿を呈し、分配問題を極度に混頓化してゐるのであるが、而もその間に、分配部門による生産部門の綜合が一の傾向として現はれつゝある現象を見逃すことが出来ない。

2. 斯 業 の 特 質

以上は米國機織産業の分化過程、各分化段階の現在に於ける機能及び其の相互關係に關する紹介である。次に私は斯業の特質を述べ、それが持つ特質の故に、該産業も業界統制に向ふべき必要に極度に迫られながら、それが甚だ困難である所以を略述しやう。

先づ機業の生産部門に關し、特に織機の性質並に形態に就て、その特殊性を見やう。織機の性質並に形態は、織布の品質數量に多大の影響をもつから、當該研究は重要である。

先づ裝備織機の性質に就て見るに、該織機は交互交換性 (interchangeability of silk and rayon equipment) をもつて居る。茲に織機の交互交換性とは、同一機械に於て絹布入絹布其他の混織布等いづれをも製造し得る性質をさす。試に全國織物會社聯合會(The national federation of textiles inc.)調査にかゝる數字により之を見れば、絹織物業法(The silk textile code)⁽⁹⁾に依り報告義務をもつ業者裝備織機は、總台數92,355中1.8%は絹布用織機にして、主に混織用⁽¹⁰⁾に使用されて居り、綿織物業法統制下にある全國入絹織物團體(The national rayon weavers group of the cotton textile code)に報告義務をもつ業者裝備織機47,728中約21%は絹布用織機にして入絹布生産に従事し、78%は絹布用織機にして混織用⁽¹¹⁾に使用されて居る。従つて今日に於ては『最早絹布産業と入絹布産業とは明確に區別され得ない』のが業界の實狀である。而してこの事の經濟上に對してもつ意義は、業者が市況の變化に應じて臨時製品を變更することに依り、製品並に原料織維市場を極度に不安定ならしめることである。

次に織機形態を見やう。織機の形態は織布能率に本質的に重大な關係をもつて居る。茲に所謂能率とは、經濟的に健全に活動し得る能力を指すが、經濟的に健全に活動する爲には、謂ふ迄もなく、生産コストの引下のみならず、市場の要求に應ずる商品の生産を必要とする。今日

(7) op. cit., p. 52. (8) op. cit., p. 50. (9) 絹布並に混織布生産に適用される op. cit., p. 10.

(10) 入絹並に混織布生産に適用される op. cit., p. 10. (11) op. cit., p. 9.

米國に於ける織物嗜好は、柔軟にして皺立たず (soft and non-crushable texture) 織癖 (stop-mark) のない織物に向ふ長期傾向がある。従つて斯る條件を近似的に満足させるものを、最も能率的にして近代的織機と稱し得るわけである。扱て斯る見地よりすれば、函型織機 (box-loom) は單純織機 (IXI plain loom) より良く、等しく函型織機にありても、箄間49吋以上の織機 (over 49 inches reed width) は、其れ以下のものより良く、自動織機は非自動織機よりも良い。蓋し柔軟にして皺立たない織物——縮緬 (crepe) が最も普通の型——に向ふ長期傾向は、箄間49吋以上のものを要求し單純織機又は箄間49吋以下の函型織機にては合理的費用に於て高級品を製造すること能はざるが故である。従つて當該織機の經濟的生命は、流行が琥珀織 (taffeta) の如きものに向ふ時のみ、ほどの良い活動の餘地を見出すに過ぎない。然るに自動織機に於ては、緯の切斷に原因する織癖を示さず、手にて緯の端を摘みあげ、新に緯卷を發する場合に生ずる時の遅れ、従つて生ずる費用増加をさけ、且つ人的勞働を増加する事なしに、1人當8台以上の織機を操縦することを可能ならしめる。従つて現在に於ては、自動函型織機こそ最も近代的要求に應ずるものとされて居る。

然らば現在米國機業に裝備されて居る織機は如何なる構成に於てあるか。

全國織物會社聯合會調査に依れば、絹織物業法統制下の業者裝備織機92,355台中14%は單純織機であり、その内71%は箄間49吋以下のものである。現在の米國人の織物嗜好

傾向よりすれば、この範疇に屬するものは多くの經濟的生命を有しない。次に函型織機は全裝備織機の86%を占め、その内83%は箄間49吋以上のものである。従つて此の點に關する限り、比較的近代化して居ると稱するを得るが、右の内自動織機に至つては、その9%にも及ばない實狀に於てある。次に絹織物業下の人絹布製造業者に就て見るに、單純織機は全裝備織機の68%

III 部門別織機裝備狀況⁽¹²⁾

(絹織物業法統制下の業者)

	原料所有工場	口錢織布業者	計
單純織機	11,819 91%	1,175 9%	12,994 100
函型織機	65,569 83%	13,792 17%	79,361 100

(綿織物業法統制下の業者)

	原料所有工場	口錢織布業者	計
單純織機	32,243	—	32,243
函型織機	14,984 97%	501 3%	15,485 100%

(12) op. cit., p. 10.

(13) op. cit., p. 10.

に達し、而も箄間49吋以上のもの僅かに5%である。函型織機にありても、箄間49吋以上のもの僅かに28%である。然し茲に注意すべきは、後者の内53%が自動化されて居る點である。茲に吾々は人絹織物業者前進の姿を認める事が出来る。右の事情は、1933年設備された全自動織機中69%は人絹業者に屬し、31%のみが絹布業者に依り採用されたに過ぎぬ事實よりするも、之を知る事が出来るのである。

以上は全体として見た織機裝備狀況であるが、之を部門別に見れば第3表の如くである。

絹織物業法下の業者に於ては、單純織機に就ては、原料所有工場91%口錢織布業者9%の割合であり、函型織機に於ては83對17の比率を示してゐる。更に函型織機中箆間49吋以上のものに就ては、前者81に對し後者は19の割合を保つに過ぎない。綿織物業法下のそれは、單純織機は原料所有工場に依りてのみ裝備され、函型織機に就ては兩者の比率97對3、箆間49吋以上のもの前者96後者4の對比を示して居る。

次に吾々は經營單位當織機裝備状況を見やう。之を全体として見れば、裝備織機99台以下の工場数は、工場總数の70.2%を占め、500台以上のもの僅に6%の有様である。如何に小規模工場の多きかを知ることが出来る。然し之を絹布製造業者のそれと人絹布製造業者のそれに分ち比較すれば、其處に大きな相違を見出すであらう。即ち前者に於ては一工場當り99台以下のもの工場總数の74.4%であるに、後者に於ては僅かに12.3%に過ぎない。逆に五百台以上の大規模工場に就ては、前者僅かに3.4%なるに、後者にありては42%に及んで居る。

次に上述の織機並に工場建築物の所有權關係を一瞥する。原料所有工場にありては、自らの建物を所有せざるもの業者總数の64.6%、口錢織布業者に於ては84.4%に及んで居る。流石に織機を所有せざるものは少く、それは兩者に於て、夫々2.4%に過ぎない。又兩者に於ける織機の所有割合は、原料所有工場は口錢織布業者の約5倍に及んで居る。

IV 經營單位當絹並人絹織機裝備状況⁽¹⁴⁾

絹織物業者

	工場數	裝備織機總數	工場百分比	織機百分比
99以下	832	23,031	74.4	24.9
100—299	203	26,393	18.6	28.6
300—499	41	11,286	3.6	12.2
500—999	19	9,724	1.7	10.5
999以上	19	21,921	1.7	23.8
	1,119	92,355	100.0	100.0

人絹製造業者

99以下	10	503	12.3	1.1
100—299	26	4,986	32.1	10.4
300—499	11	4,263	13.6	8.9
500—999	18	11,008	23.4	23.1
999以上	16	26,968	19.8	56.5
	81	47,728	100.0	100.0

以上合計

99以下	842	23,534	70.2	16.8
100—299	234	31,379	19.5	22.4
300—499	52	15,549	4.3	11.1
500—999	37	20,732	3.1	14.8
999以上	35	48,889	2.9	34.9
	1,200	140,083	100.0	100.0

建物を所有するものさへ少い。されど茲に於ても原料所有工場は口錢織布業者より遙に大きく強固な組織を持つて居ることを知る。

依是觀是、米國の絹並に人絹布産業は、一世紀以前にその端を發し、絶へざる成長に依て、主要な消費財産として、重要な地位を占めて居るにも拘らず、其の設備に於ては、前時代のものを其儘繼承し著しき改良の跡を見ず、加之經營規模は狭少にして、小規模單位亂立し徒に

以上を概観して(1)織機の裝備状況は之を全体として見れば未だ近代化の域に達しては居ない。然し人絹織物業者に於ては相當程度の近代化計劃を認めることが出来る。(2)上述の織機裝備状況を部門別に引直して之を見れば、原料所有工場が斷然優位にある。この事よりして口錢織布業者は未製品織布に集注し、原料所有工場は高級織布に向ふ傾向が存することを知る。(3)次に其の經營規模は一般に狭小である。されど之は絹布業者にのみ妥當する現象であつて人絹布業者は一般に大規模經營により構成されてゐる。(4)投資關係に就ては、其の詳細を知るに難いが、建物織機の所有權關係のみに就て見れば、自らの

(14) op. cit., p. 19.

抗爭を事として居る。茲に商業資本家たる仕上業者の支配を許す最大な原因が存するのであらう。

3. スタイルの問題と斯界統制の困難

機織産業特に絹並に人絹布産業に於ける最も本質的な特徴は、それが流行品産業(fashion industry)換言すれば、それは絶へざるスタイル(style)の變動に制約せられ、その域内に留るべく宿命付けられてゐる事情である。斯業に於てはスタイルの作用が、總ての營業政策、總ての生産分配の方向を決定すると云ふも過言ではない。従つて茲にスタイル問題に關し、節を改めて論述する。

先づスタイルは如何なる原因に依て變動又は循環するのであるかに關し、クアルナーの説明を聞かう。彼は模倣の動機がスタイルを普遍化し、差別の動機が新しきスタイルを生起せしめると云ふ。即ち『模倣の慾望は終局消費者の最も根本的な感情的購買動機である。にも拘らず凡ゆる流行は、その普及に依て、却つて自己破壊の萌芽を成長させて居るのである。即ち模倣の動機に依て流行が普遍化するや否や、スタイル指導者は差別の動機に依て影響されて、最早それを欲しない。蓋しそれは余りに普遍化されて了つたからである。』⁽¹⁵⁾『併し一般の見解に反して、スタイルの變化は朝三暮四のものではない。新柄の出現とそれが確定的人氣を確立する迄の間には、多くの時が経過する。ある新様式が普及すると、暫時にして所謂新柄が誕生する。而してこの新柄は何時かは、ある季節の新柄の出現に依て代替されるのである。この過程は不確定的ではあるが繰返して行はれる。』⁽¹⁶⁾而も『織物分野に於てはスタイルは四の大きいさ——原料(纖維)織方、色合、意匠(material (fiber) weave, color, and design)——に於て現はれ、それは當時の衣裳形態と歩調を合さねばならない。而してそれは先づ高級流行衣裳界に發展し久しからずして大衆消費の部面に影響するのである。』⁽¹⁷⁾

以上の如くスタイルは模倣と差別と云ふ相反的動機に依て生成發展せしめられ、而も不確定的に四の大きいさに就いて起る。従つて、若しスタイルの變化が色合に於てあらうと、織物の構造に於てあらうと、生産者に依り豫見されなかつた時又は方法で、消費者需要を變化せしめるならば、茲に過剰生産と云ふ現象を惹起せしめるのである。誠に斯業は流行品産業である事よりして、絶へず『使用し得ざる商品』に悩まされて居る。勿論該産業の過剰生産は、生産設備の過剰と云ふ原因にも依るであらうが、該産業がスタイルに制約される季節産業であると云ふ事情が、最も本質的原因である。

斯くの如く斯界は、不斷に變轉して止まないスタイルの制約をうけ、過剰生産に悩まされてゐるにかゝらず『多くの口錢織布業者、ある場合には原料所有工場までも、彼等の生産計劃の豫想として、信頼し得る商業案内よりも、寧ろ商業上の風聞に依頼する場合が可なりが多いのである。群衆の赴く所へ彼等も行く。若し織物の賣行良好ならば、季節末に至つても、彼等の多くは恐らくは生産を増加するであらう。斯る Sheep、ライク(sheep-like)の行動は、當該特定商品の季節殘品を損失ならしめるのみならず、他財の價格にも影響を及ぼすのである。』⁽¹⁸⁾かゝる業者の統制なき行動は、さなきだにその性質上生産過剰を伴ひ易い該産業をして愈々その苦に拍車を加へる事となるのである。

誠に生産の消費への追従、消費の範圍内に生産水準を維持すべきことは不滅の經濟法則である。従つて該法則に違反せんか、如何なる産業も、暫ては崩壊への道を辿らねばならないのである。然るに機織産業にありては、上述の如く産業そのものの性質が不斷の生産過剰を結果するのに、業界に於ては、(1)それが季節産業である、(2)一般に見本取引(sampling practice)

(15) (16) (17) op. cit., p. 60. (18) op. cit., p. 60.

を行つて居る、(3) 生産分配兩段階の利害對立が甚しい、(4) 原料繊維の供給を他國に仰ぐ、等の諸事情の故に生産の調整は頗る困難である如くである。

季節産業と云ふ斯界の性質が生産統制を妨ぐる所以を、コペランドは左の如き引用文を以て説明して居る。即ち『該産業は季節商品を取扱つて居る。従つて當該年度の毎各月に等量を購入することを公衆に期待することは出来な⁽¹⁹⁾い。生産並に分配の要求は對蹠的に相互に相反して居るので、一方は譲歩せねばならぬ。唯一の事が可能である。即ち生産は分配に適合せねばならない。がこの事は季節的底點に於ては、生産は極度に縮少されねばならぬ事を意味する。不幸にして凡ゆるものに妥當する如き一般的解決策は、この生産問題に關しては發見されて居ないのである。』と。次に見本取引に關しては、『該産業には正確な豫想を爲すを妨げ而もその解決策は之を發見し得ない如き一の慣行が今尙存して居る。予は當該行爲を衣裳仕立業者が、各源泉より多數の見本切——衣裳製作に要するより遙かに多き——を購入することに歸したい。』⁽²⁰⁾『織物製造業者が、自己の分配可能に付てなす、實際の販賣數量に付ての唯一の豫定尺度は、取引に於て織物引受の指示となるところの是の見本の範圍である。』然るに『若し見本が拙劣であるならば、恐らくその織物は成功しないであらう。余りに廣範圍に見本を出すならば、それを凡化する事に依て織物を殺す。若し多量の見本を出し生産豫想を該見本の結果に基き立てるならば、種々な原因例へば商品を購入した衣裳製作者はそれを仕立てない、或は價格割引の故に他品を代用する等々の理由で、該織物の販賣は實現しない。その結果製造業者は多額の商品を手持し、それを動かす爲には價格割引を行ひ、財政的損失を結果せねばならない。』斯くの如く販賣豫測を爲すの困難は、謂ふ迄もなく生産所要額の豫定を困難ならしめ、生産調整の實行を妨げる。

生産分配兩部門の對立に就ては既に上述した。殊に仕上業者が、數年に亘つては存續し得ない如き口錢織布業者をして業界に流入せしめ原料獲得を有利に展開せしめんとする傾ある事は業界の一元的統制を殊に困難ならしめる。次に生絲生産の統制は、謂ふ迄もなく、日本政府に依り行はれるのであるから、當該統制に關しては間接に影響を及ぼし得るに過ぎない。

4. 統制の必要とそれへの動き

以上に亘つて私は米國機械産業の分化過程、分化に依て生ぜる各段階の不可避免的磨擦、並に機業現在に於ける諸特質を論述した。而して業界の特質は不合理の諸相でもあつた。原料價格のムラ氣 (the vagaries of the raw material market) スタイルの變動、裝備設備の非近代化、小規模生産單位の亂立、見本取引の慣行等は、當該機業をして不合理な産業たらしめる主要原因である。特に斯業がスタイル又は流行運動の先頭を切るべく宿命附けられて居ると云ふ事情は、當該産業をして市況の不斷の變化にさらし、それをば投機的産業たらしめて居るのである。

當該産業が如何に不安定な産業であるかは、該工場の變化率又は變轉率 (the rate of change or turnover of firms) を見る事に依りて容易に首肯し得る。第5表に依るに、例へばニュージャージー州に於ては1921年には749工場が、1929年には609工場が登録されてゐるが、この九ヶ年間に964工場が斯界に流入し、921工場が流出した事が記録されて居る。この數字はニュージャージー州に於ては斯業に従事した工場中34%のみが近年も尙活動を繼續してゐるに過ぎない事を示して居る。殘存せるものに對し殆んど二のものが流出入した譯である。この趨勢は他州に於ても亦之を認める事が出来る。

(19) op. cit., p. 4. (20) op. cit., p. 5. (21) op. cit., p. 5.

V 織物製造工場の變化⁽²²⁾

	工場数		流出工場 流入工場	
	1921	1929	1921—1929	
ニュージャージー	794	609	921	964
ペンシルバニア	167	216	107	155
ロード、アイランド	16	24	18	28
ニューヨーク	38	33	36	41
マサチューセツツ	9	19	9	22
コネクチカット	11	16	2	8
計	990	917	1,093	1,218

短縮(year-round or periodical reduction of hours)等幾多の意見が開陳されて居る。然しながら惟ふに組織の統制が、産業發展の爲の最も重要な鍵ではなからうか。斯業不況の原因には上述の如く種々なる原因がある。その或るものは産業そのものゝ外に其の原因を有し、或るものはその内に原因を蔵して居る。併しながらスタイル變遷の如き對外的原因は、有機生産に於ける氣候の如く、人爲の範圍外に於てある。然し對内的原因は然らず。然るに對内的原因の多くは、原本形態よりの諸分枝の分離の故に生ぜるエビル(evil)なる場合が多い。従つて組織の統制こそ、該産業の今後向ふべき方向であり、而して社會進化の法則は、その好むと否とに拘らず、當該方面へとこの産業を推進して行くであらう。それがあらぬかクアルナーは本書の卷末に於て『この産業が生産仕上並に販賣の諸機能を遂行する事能はず、また喜ばない多數の小規模單位より構成されまた分配者が商品生産上の實際經營に對し責任を負ふことなく生産分配を支配する限り、該産業は當然受け得べき繁榮をも享くことは出来ない。惟ふに當該産業が利潤獲得に向ふ次の段階は——不況時にも安定を増し、有利な販賣方法を結果する進歩的商品化方法をもつた——大單位にまで會社結合を行ふ事であらう。この事は總ての小規模生産者は、大織物會社の發展に依て、排除さるべき限界單位として考へらるべきであると云ふことを意味しては居ない。大企業が多くの小企業と共存し得る證據は、電気及び其他の製造工業に於て示されて居るところである。小規模業者に關しては、——口錢織布業者、原料所有工場共に——適當な協同手段こそ凡ての製造業者に對し、有利な競争條件を與ふるものである事は信すべき理由がある。垂直的であらうと水平的であらうと、會社結合の線に沿ひ、織物産業を再組織し、數個の大會社を出現せしめる事は、順次に分配者の地位を改良し、利潤獲得を増し、恐らくは健全なる事業狀況を出現せしめるであらう。根本的に重要な再組織が企てらるゝに非ざれば、當該産業は多くの小規模單位の壊滅と損失を惹起するに過ない危急な過渡期とを目前せねばならぬであらう。』と結んで居る。

誠に組織の統制は該産業にとりては殊に必要である。而して米國機織産業等にありては、斯る組織の統制は二の線に沿ふて行はれて居る様である。一は原料所有工場の協同組織による仕上及び分配部面の綜合であり、他は上述の如き仕上業者の口錢織布業者の支配による原料部門の獲得である。併し前者に依る仕上並に販賣部面の綜合は未だ遅々たるものゝ如く、⁽²³⁾高級織物を取扱ふ小數製造業者は、その分配分野を保護する爲に仕上並に販賣活動計畫を企てた⁽²⁴⁾程度にすぎぬものゝ如くである。反之仕上業者に依る生産部面の支配は上述の如く著しき程度に進んで居り、而してこの趨勢は、業者が未完成狀態に於て製品を賣却する行爲が進展するに従つて増大するであらう。然し仕上業者が、生産部面の支配を口錢織布業者を流入せしめる事に依てのみ保持せんとする限りは、斯業をして健全な基礎の上に、それ自らを建設する事を不可能

(22) op. cit., p.22. (23) op. cit., p.76. (24) op. cit., p.69.

ならしめるであらう。

結 言

以上に亘つて私はコペランド並にタアルナーに依る米國の『絹並に人絹織物の生産と分配』なる勞作を紹介した。本書に依て吾々は、アメリカ機織産業特に絹織物産業は、世紀に亘る不斷の發展に依て年産額四億弗を超ゆる重要消費財産業としての地位を占めながら、而も可なり多くの不合理に悩む産業として之を了解した。誠にアメリカの機織産業は、之を發展史的に見れば、未だ散居的工業經營時代に留まり、初期資本主義の段階に位するものと云ひ得やう。

高度獨占資本主義段階にあるアメリカ現在の經濟情勢下に於て、何か⁽²⁵⁾産業を斯る段階に留まらせておくかと云へば、惟ふに之はスタイル變動に基く大規模經營化の限局に存するではなからうか。經營は結合して大規模化するにつれて、其の伸縮性は減する⁽²⁶⁾。従つて市況變動の激しき産業に於ては、大規模經營に基く危険大なる爲、その實現は一般に困難であるが、この事が斯業をして斯る段階に留らせておくのではなからうか。従つて各産業部面の統制、その合理的組織化が叫ばれ、原料資源の獨占化傾向が強い現代の經濟情勢下に於ては、四圍の事情と産業それ自身の内在的要求とに依て、産業統制への進行は、斯界に於ても不可避的傾向があらうが、斯界に於ける限り該統制には恐らく其他の近代的工業に見らるゝが如き經營の集中は之を伴はないであらう。仕上業者が生産部門を自らの經營に包攝する事なく、原料資源を獲得せんとして居る努力は、右の事情の證左である。勿論投資關係に基く企業集中の傾向又は組合的結合に依る分配部面の綜合は、今後益々進行するであらうが、それは飽迄經營集中を伴ひ得ないであらう。吾々はこの點に關しタアルナーの論述の不鮮明さを思ふ。

It is believed that integration of companies into larger units is the next step toward a return to profits for the industry. 又は Reorganization of the textile industry along the lines of integrated companies, whether horizontal or vertical, with the emergence of several large corporations.⁽²⁷⁾

この論述に關する限り、彼の意圖するところは、經營の集中を意味して居る如くである。併し水平的であらうと垂直的であらうと、消費部面の規格統一が進行し、市況變動の減少せざる限り、斯界に於ては大經營化の實現は困難である。

而してこの點に絹織物産業の高次財段階とも云ふべき蠶絲業に於て、相似現象を發見するのである。即ち蠶絲業に於ても、社會經濟の現段階に至つて二つの綜合化傾向が現はれ、派生者に依る被派生者の綜合傾向としては、製絲業者の特約取引に依る養蠶農家の獲得、同じく製絲業者の兼營又は委託による蠶種製造への進出として現はれ、被派生者による派生者の綜合傾向としては、組合製絲に依る製絲事業への進出として現はれて來た。然しこの綜合には經營の結合は之を伴つては居ないのである。蓋し養蠶業は有機生産殊に最深の注意と技術とを要する昆蟲飼育を、生産の本質とする事よりして、大規模經營を不可能ならしめて居るからである。誠に絹に關聯せる生産業は、その最高次の生産段階より最低次のそれに至るまで、前者は有機生産と云ふ性質より後者はスタイルに影響される産業として、共に大規模經營化を不可能とされて居るのである。私は茲に絹と中小經營と云ふ宿命的聯關を思はざるを得ないと同時に、此處に中小農業者又は中小工業者の生存餘地⁽²⁷⁾を見出すのである。勿論商業又は工業資本の進出を防

(25) 小島精一氏著、産業の合理化、p. 60 p.70. (26) op. cit., p.76.

(27) 生絲業の工場分散制度特に中規模經營への集中化傾向に關しては、本位田祥男氏、製絲業經營の研究(經濟學論集)第六卷一號、20頁以下參照。養蠶業の同一傾向に關しては、本位田祥男氏、養蠶經營の研究(上)(蠶絲界報 Vol. 45, No. 535, 10頁以下參照) 蠶種業に關しては、小西俊夫氏、蠶種業經營の規模比較、(農業と經濟第三卷第三號、158頁參照) 並に、農林省蠶絲局、蠶種製造者の經營に關する調査、1頁及び11頁參照)

衛し、自らを健全な基礎の上に發展せしめる爲には、協同組合の組織を借らねばならない。

(於 上田蠶絲專門學校)

(受理 昭和11年 8 月30日)

On the present situation of American silk and rayon broad goods.

Tokoro KOIZUMI.

(Received, 30 August, 1936.)

Résumé

From what has been stated by Mr. Turner, we understand that the American broad goods industry is suffering from a variety of afflictions. These afflictions are mentioned as follows: the vagaries of the raw material market, the style and fashion cycle, the obsolescent equipments, the inevitable conflicts among four types of operators, the sampling practice, etc. Some of these have their origin without, others within, the industry. Here we will not touch on the subject of the origin without, but will take up the origin within only.

The greater part of these origins will be mainly attributed to the fact that two other branches—the commission weaver and converter—have come from the primary form—the stock carrying mill. Therefore, the control of these branches is most important for this industry under the present condition, and the law of social evolution will naturally lead the industry, whether those engaged in this industry are willing or not, to the direction above mentioned.

But the control of this industry will not bring about the combination of the management with it. For, in the combination of this sort, there is a great danger resulting from the diminution of elasticity of its management. For this reason, the combination of enterprise may be done in this industry, but that of management is hardly to be hoped. I am sorry to find that Mr. Turner is not sufficient and is vague in the explanation of this point.

(College of sericulture and silk-industry, Uyeda, Japan.)